

大学下部リーグ情報

明大が22年ぶりの大学日本一となった2018年度の大学シーン。スポットライトを浴びるチームはほんの一部のみ。それぞれのリーグ、クラブにも、自分たちだけのストーリーがある。

今回紹介するのは関西大学Bリーグの京都大学。2018年シーズン、気持ちの入った戦いを続けた。

●18年度はBリーグ3位。次は！
京大ラグビー部

昨年(2018年)の2月22日。平成最後のチームの始動を見とどけようとする新年会に参集した京大ラグビー部OBの面々は、どっと沸いた。有澤善大主将が「Bリーグ3位以上」という高い目標を敢然と掲げたからだ。

京都大学ラグビー部(KIURFC)は、慶大につぐ日本で2番目に早い創部を誇る伝統校だ。関西大学北川FWコーチの情熱あふれる指導のもと、体は小さくとも固いバックで鋭く押しこむスクラムを繰返す。このスクラムが、今シーズンの躍進の原動力となった。



リーグ戦には同志社大とともにその立ち上げから参加し、戦前には3度の全国制覇、戦後は5度の大学選手権出場など輝かしい戦歴を刻みつつ、昭和のほぼ全期間をAリーグで強豪相手に奮闘しつづけた。

とはいえ過去の名声で勝てるほどラグビーは甘くない。昭和の終わりにBリーグに降格した京大は、平成の30年間、BリーグとCリーグをひたすら行き来しつづけた。今回も入替戦に勝つてようやくBリーグに復帰したばかりなのに、10チーム中3位以上、つまり7勝以上するなんて……。歓声をあげつつも、正直、OBたちの胸中は複雑だったのだ。

しかし、である。平成最後のシーズン、京大は快進撃をつづけた！初戦の追手門学大に12点差をひっくりかえして快勝したのを皮切りに、トンガ人留学生3人を擁する花園大巨漢ぞろいの大産大といった難敵を、小粒だが固いバックのスクラムと、後半に走り勝つフィットネスの充実と、低く突き刺さるタックルで、次々と倒していった。

あるスキルを習得する要諦は、基本を徹底的に反復して体に覚えさせることだ。いったんそう納得した後の京大の部員たちの粘り強い実践を、藤井BKコーチは高く評価している。



「最後まで諦めず、果敢に出っかける。その姿勢が、今シーズンの数ある逆転勝利を生んだ。その一つ、東大戦におけるトライシーン。一留学生たちを中心とする花園大の力強いアタックをしのいだ京大は、ラストワンプレーでついに逆転トライをあげた。歓喜の瞬間



みごと目標の7勝、3位以内を達成した有澤主将は、しかし口惜しさを滲ませる。「入替戦へ出場、さらにAリーグへ昇格するためには、3位以上」の「以上」という言葉に甘えてはいけなかったと。

だが、舞台はとこのつたと云うべきだ。30年間、京大ラグビー部員たちの見果てぬ夢でありつづけた、A



神戸大に勝利して、7勝2敗の3位でリーグ戦を終える。長いリーグ戦を戦いぬいた後の達成感のはじけた

リーグ復帰への。石田貴一主将(本郷)、安部武副将(大分舞鶴)がひびく新チームは、その巨大な目標を、びたりと見すえてハードワークを誓っている。

もちろん、学生ラグビーの常として、チームの要である4回生は卒業する。だが、京大ラグビー部は、自分たちの果敢なチャレンジを意気に



感じ、ラグビーというすばらしいスポーツに青春を賭ける熱い仲間たちが大勢あらわれると信じている。

「スポーツ推薦なんてものには縁のない国立大学が、強い私学たちに伍してAリーグ昇格をめざして争う。これほどやりがいのあるチャレンジはない」(溝口正人監督)

「15人で勝利を味わう喜びを、大学で2番目に古いルーツを持つチームで経験し、生涯の友をたくさん作ってほしい」(北川有広コーチ)

宇治の山をおおぐ広大な天然芝のグラウンドで、Aリーグ目指して一緒に楢岡球を追わないか——この誘いに胸たざらせた君よ。京大ラグビー部は、君をこそ待っている。

(文/高原 聖) 練習後、宇治のグラウンドにて。強いチームになるためには、ハードトレーニングだけでは十分ではない。「自由に自主的に楽しめ」という京大ラグビー部のモットーの、面目躍如たるワンショット